B 72　中部地区における着衣動向について　第1報　小学生

市邨学園短大　磯部光子　　岐阜女短大　　大池昭子
○名古屋女子大　酒井清子　　名古屋市立女短大　佐野栂子
岐阜女短大　道家芝さ　　山田家政短大　　籏美代子

目的　生活環境の変化するなかで，衣生活においても，被服材料が複雑になり，着用服種およびその組み合わせも，多様化している今日，成長期における学童・生徒の着衣の実態について，日本家政学会被服研究委員会が，全国調査を行った。この調査で中部地区を担当し，若干の成績を得たので，今回は被服衛生的立場から検討を加え報告する。

方法　調査時期は，昭和54年4月，7月，10月，昭和55年1月の計4回を，中部地区において実施した。調査対象は，小学生，5，6年生延べ人数男児631名，女児656名，計1287名とし，4回の計測時の対象者は，同一学童とした。調査の内容は，着衣重量の計測，着用感，着衣服種と枚数，服種の組み合わせ，最内衣服の着用状況，衣服重量と荷重分布などである。

結果　着衣感覚　1)　全身の快適度は，四季を通じて「良い」と答えた者，男児78％，女児86％。2)　寒暑感覚は，7月において，「普通・すずしい」と答えた者，男児64％，女児85％。1月において，「普通・あたたかい」と答えた者，男児79％，女児85％。3)　しめりぐあい7月において，「普通・さらっとしている」と答えた者，男児82％，女児84％。着衣感覚で不快を感じている者は，ほとんどいない。

上半身用衣服最内衣に下着を着用している者は，7月において，男・女児ともに27％，1月において，男児69％，女児82％である。夏期においては，4人中1人が着用者であり，冬期においては，男児4人中1人，女児5人中1人が未着用者である。

着用服種およびその組み合わせにおいて，女児は男児より多種多様であった。